遠 い 日 の 君 へ

TO O I HI NO KIMI HE

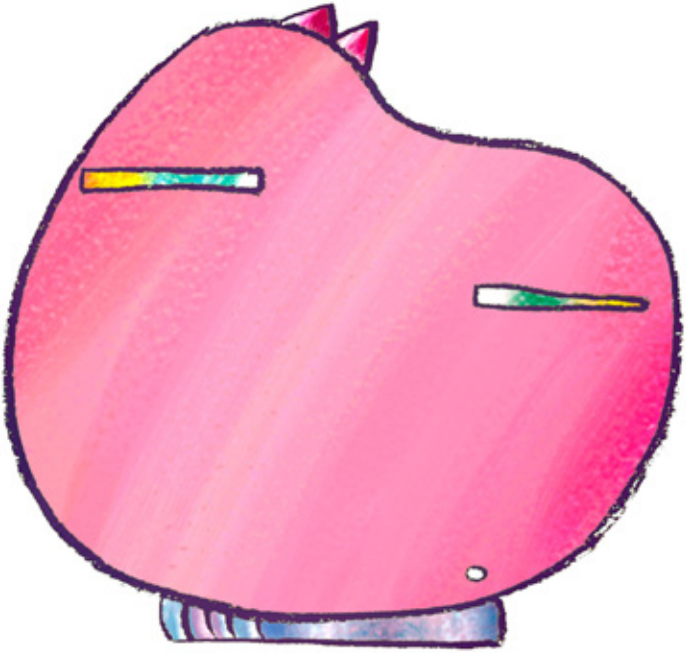
絵とことば
江口真代（みのり）

君はどうしていますか？
元気ですか？
悲しい目に会ったりしていませんか？

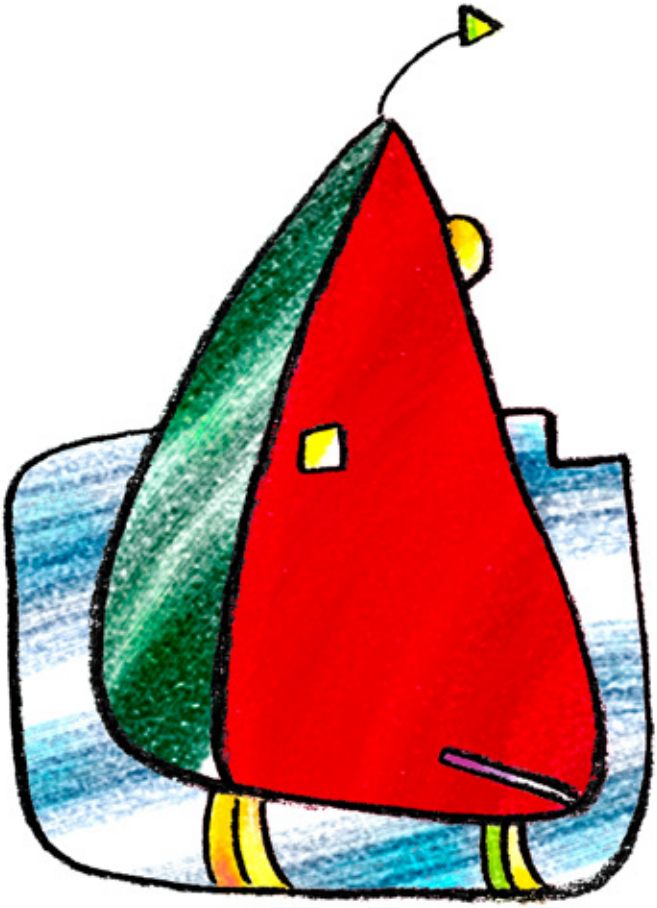
あの日君に言えなかったこと
今も言えずに覚えています。

あの日の君のこと

あの日のボクのこと



君にやさしくしたかったんだ



淋しそうだったことが

抜けないトゲみたいに痛い

ボクはボクのことで手いっぱいで

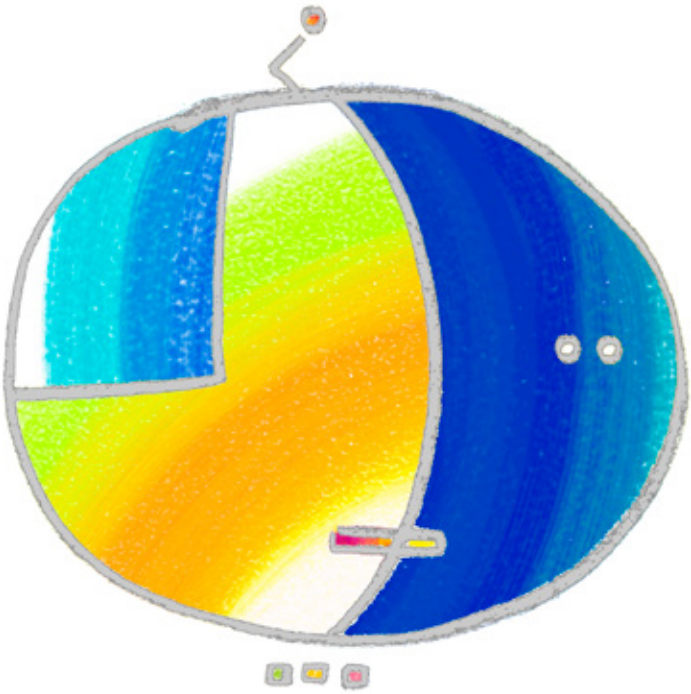
それが悲しい

きっとみんなそうなんだよ

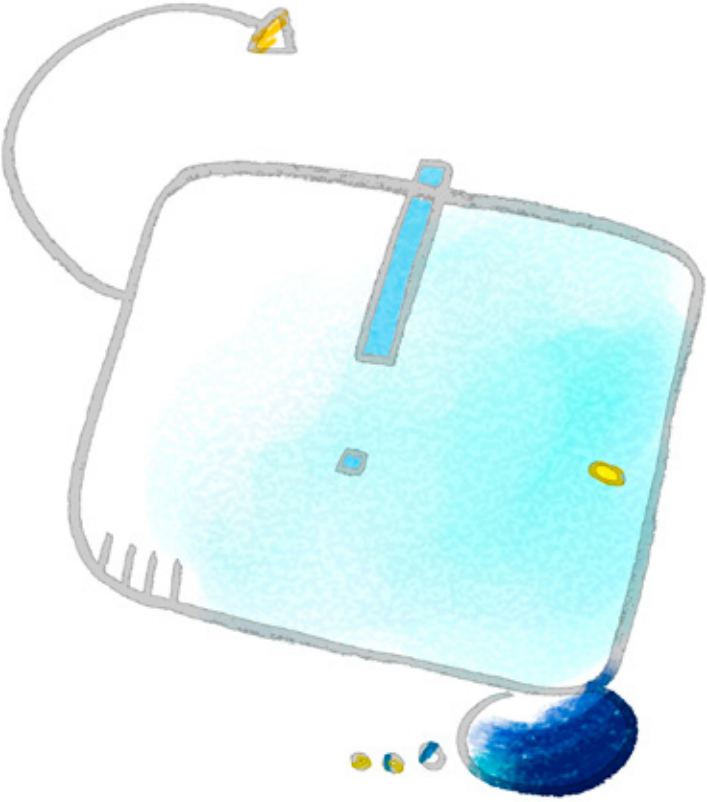
いつまでそんなこと

こだわってるんだろう

ねえ、君はあの時....



まっいいか、なんてね



それは、

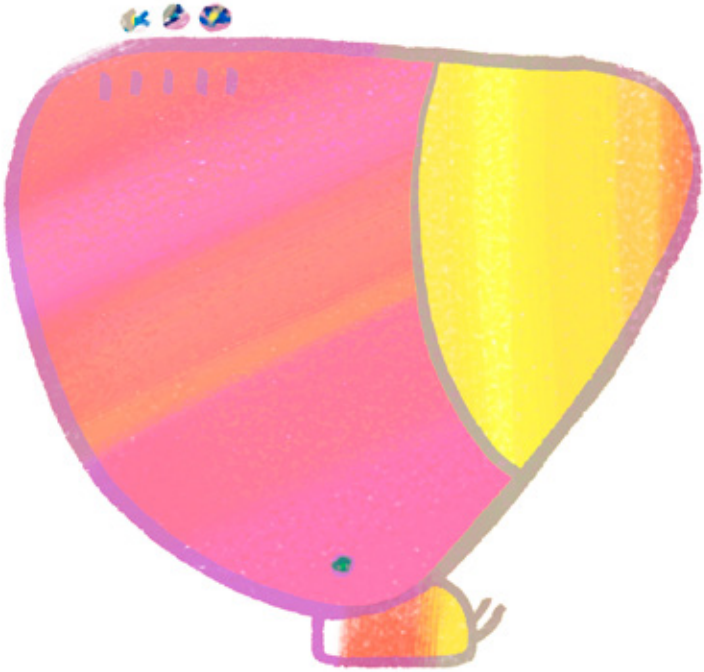
まちがってなんかないよ

覚えてる？ 覚えてるの？

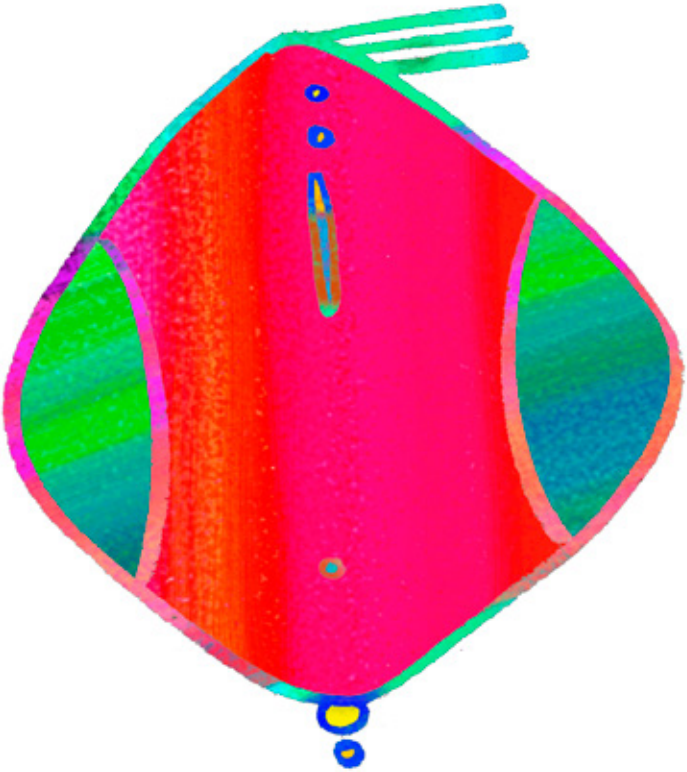
忘れてほしいのに

知ってるんだ

そんなことどうでもいいって



あんな笑顔にまた会えるのだろうか



ボクはもう

君の居場所も知らない

　その頃、私のクラスでは、思い思いの飲み物を水筒に入れて学校へ持参することが流行として広がりはじめていた。
ペットボトルのミニサイズはまだ発売されていず、自販機のお茶やミネラルウォーターも無かったと思う。
紅茶やジュースにココア、今時の女子高生がどうなのかは知らないけど、自分の持ってきた飲み物を友人と交換したり、自習にでもなれば待ってましたで、机の上にポテトチップを広げて教室でピクニックよろしく、いつものおしゃべりグループで集まった。

　あの日が、春だったのか、夏かだったのか、今はかすんで思い出せない。たぶん午後、放課後？
彼女は「カヨちゃん」と呼ばれていた。小さくて、地味で、成績優秀。恥ずかしそうに笑う娘だった。

　一緒にいるグループではなかったので、ろくに話をしたこともなかったと思う。噂では喘息か何かで夜更かししただけで命に関わるとか。
そんな風でも学校にはちゃんと来ていて、まじめな彼女をすごいなぁと思いつつ、私側でなんとなく壁を作っていたのかもしれない。今思えば。

　あの時私は一人で廊下から教室へ入った。何気なく、いつものように。そこには彼女が一人立っていた。手に透明なビニールの袋に入った筒のようなものを持って。
　私は視力だけは良い。ビニールの中では茶色の液体が漏れていて、汚らしく水色の筒とビニールを密着させていた。
さえない筒の水色が茶色くべたべたして見えて、たぶん一瞬で、私の顔はいやなものを見た表情になったろう。
汚いものを見たような。

その瞬間彼女と目があった。

彼女ははっとして、とまどいとうろたえのようなものが見て取れた。そしてすごく、すごく恥ずかしそうに手の中のものに目を落とし、小さな声で

「こぼれちゃった・・・」と言った。

　彼女が飲み物を持ってきたの見たのは初めてだった。初めて学校に持ってきたのかもしれなかった。

飲み物の容器には、無言でセンスが問われていた。だからみんな気をつかっていた。かわいく、きれいでなければならなかった。そして彼女のそれは明らかに、かわいくきれいではなかった。

うつむく彼女は私からは逆光の位置で窓際に立っていた。

　私は普段彼女を「かわいい魅力的な女の子」とは思っていなかった。なのに不思議にその瞬間の彼女は、天使のように清らかに、はかなげに見えた。
たぶんだれにも見られたくはなかったであろうものを見られたという屈辱的な気持ち？
ゆれる白いカーテンも射し込む日差しもすべてが、まるでその瞬間の彼女をいたわっているかのようで、私は嫉妬したのかもしれない、私の知らなかった魅力を持っていた彼女に、何も言えなかった。
でも、シチュエーションとしてそれはとてもまずかった。

　私は「いやなものを見た」表情を彼女に見られていた。彼女は、絶対、私が彼女の持ち物に嫌悪感を示したと受け取ったに違いなかった。

実際は私はそんなに嫌悪感を抱いたわけではなかった、と思う。でも、彼女を傷つけたと、私は確信した。フォローしたかった。何か、何でもいいから、言うべきだった。なのに私は、何も言えなかった。

　見ない振りをしたんだろうか？

　聞こえない振りをしたんだろうか？

そして、機会を一生失ってしまった・・・

　普段、彼女と話したことの無かったことは、要因の一つであったろうと思う。その頃の私には、他に大きな悩み事があったかもしれない。もしかしたら、彼女を傷つけたであろうこと自体、認めたくなくて忘れたかったのかもしれない。すぐに忘れたつもりになれていたかもしれない。

　でもこういうことは、どうやら私は簡単に忘れられないようにできているらしい。何かのきっかけで時折、うつむいた彼女の寂しそうな、悲しそうな、日射しにとけてしまいそうな姿が目に浮かぶ。

　私は彼女のことはほとんど何も知らない、覚えていない。兄弟がいるのかさえ。でも、あの時の彼女の姿が目に浮かぶと、心が痛くなる。どうして、何も言えなかったのかと、水筒のお茶がこぼれたからって大したこと無いって。

「カヨちゃん、元気ですか？

喘息は、大丈夫ですか？

あなたが覚えているかどうか、わからないけど

あの時、何も言えなかった自分のことは、

今でも寂しいです。」

遠　い　日　の　君　へ

「TO O I HI NO KIMI HE]

2001.11

絵とことば

江口真代（みのり）

無断転用・複写を禁じます。

e-mail info@supa.com

ホームページ　https://www.cieloni.com/m